

現代東南アジアにおける映像介入

光成歩

2009年11月13日(金)～15日(日)、京都大学の稲盛財団記念館において国際シンポジウム「現代東南アジアにおける映像介入」(Filmic Intervention in Contemporary Southeast Asia)が開催された。フィリピン、シンガポール、ベトナム、ラオス、カンボジア、マレーシア、インドネシア、ビルマ、タイの映画・映像をテーマとし、12人の報告者と一般参加者が活発な議論をおこなった。ここでは、島嶼部東南アジアに関する7つの報告を中心にまとめと感想を述べたい。

◆Political Film Collectives and People's Struggle in the Philippines (Roland B. Tolentino)

独立映像制作(Independent Filmmaking)もしくはインディーズ映画(indie film)が、全ての階層の人々に「中間層らしさ(middle-classness)」のイメージを共有させ、また映像技術が人々への訴え・動員・組織化に用いられているとし、これら独立映像制作が新自由主義的な政治・経済への移行で不可視化する国家に対して市民の社会活動を支える政治プロジェクトの役割を果たしていると分析した。

◆National Globalization, the Creative Economy and the Politics of Filmmaking in Singapore (Kenneth Paul Tan)

映画制作が文化事業の一環として政策的補助を受けるなか、独立映像制作(Independent Filmmake)を手掛ける二人の制作者(Tan Pin PinとMartyn See)を取り上げ、それぞれの作品を分析した。シンガポール政府は一方で商品として映画を育てようとし、他方では「政党政治映像」の制作や頒布を禁止しようとする法的制限を設けている。報告者は、これが社会・政治批判的な独

立制作映画をサイバースペースに流出させ、それに人々の関心を向けさせるという逆説的な結果にもつながっていると指摘した。

◆Citizen Journalist Armed with Video Camera (Yasuko Hassall Kobayashi)

シンガポール政府がMartyn SeeのSingapore Revel(与党に糾弾される野党政治家を取材したドキュメンタリー映画)を「政治的映像」として取り調べ・処分を行った事件以降のSeeの映像やブログ活動の展開を分析した。従来の研究がシンガポールの市民社会涵養やそれに果たすインターネットや映画・映像の役割を悲観的に予測してきたことを批判し、インターネットや映像を通じた意見表明を「個人の文化の政治」、つまりある事象に対する社会的理解に対する挑戦として評価すべきだと論じた。

◆Malay(sian) 'Patriotic' Films as Racial Crisis and Intervention (David C. L. Lim)

マレーシアにおける愛国＝民族主義マレー映画を分析した。その低迷と新進の「多民族的マレーシア人」による独立映像制作の台頭という映画界の現況を一方に、そして他方にUMNO衰退と多民族政党の躍進という状況を置いて、両者の並行関係を論じた。しかし報告者はまた、マレー一人支配(Malay dominance)イデオロギーの根強さ・弾力性にも言及し、ポスト民族主義の到来には慎重な態度が必要と述べた。

◆Who are 'Our People'? Reading Abu Bakar Ella's Orang Kita (Our People) and PTI (Unauthorized Love) in Sabah, Malaysia (Yamamoto Hiroyuki)

サバにおける第三のナショナリズムの萌芽として、Abu Bakar Ellaの映画における「我々の

民」という概念を提示した。「海の民」と「陸の民」という二つのグループが外の世界との関係性によってそれぞれの属性を定義・再定義してきた歴史過程をサバにおける二つのナショナリズムの潮流と捉える。その中にも半島のマレーシア社会を相対化する枠組みが見出せることを指摘しながら、さらに二つの映画から「我々の民」という概念を取り出した。報告者はこれを、外来の人間でも合法的に社会に入ってくる人間を排除しない、つまり「反～」「～以外」という区切り方を必要としない統合原理であると評価した。

◆The Hero in Passage: The Chinese and the Activist Youth in Riri Riza's Gie (Abidin Kusno)

若くして亡くなった華人青年運動家を題材とした Riri Riza の映画 Gie を取り上げ、現代インドネシア社会におけるリーダー像、学生像、そして華人像規範の再構成と評した。報告者は、スハルト体制下の Bapak-ism を脱却した青年リーダー像、そして体制崩壊後に社会運動の担い手として台頭する大学生らに向けられる理想の学生像(成熟、清廉さ)を抽出し、さらに Gie において華人であることがナショナル・ヒーローの資質に関係しないことが示唆されていると指摘した。

◆Between Devout Faith and Coexistence: Negotiating Islam in Indonesian Films after the 2002 Bali Bombings (Nishi Yoshimi)

スハルト体制崩壊以降のイスラムを扱う新しいジャンルの映画 Long Road to Heaven と Ayat Ayat Cinta をバリ爆破事件後のインドネシア・イスラム再提示の試みとして論じた。テロリズムとイスラムを結びつける外部の視線に対するインドネシア・イスラム社会の返答、また信仰実践と他者

との共存のための努力とは異なるものであるというメッセージが込められていると分析した。

以上の各報告に加え、ラオス(ラオスにおける独立映画制作成立の可能性)、ベトナム(現代ベトナムと在外ベトナム人社会という二つの社会の架け橋としての映画)、カンボジア(紛争後のカンボジア社会における男性性 masculinity の変化; 金=男性性による女性=カンボジアの支配)、ビルマ(ビルマ映画における少数民族シャンの表象のありかた)、タイ(東北タイから都市部への移住労働のコメディによる表現)など、映画から社会を考察するにあたって非常に多様なテーマ設定が見られた。

島嶼部東南アジアについては、政府や国家と市民との関係が中心的な分析テーマとなっているように思われる。ただし本シンポジウムでの議論は、Kobayashi 氏が述べたように、政府と対峙する市民社会を想定した従来の市民社会論とは枠組みを異にしている。映画や映像メディア、さらにはサイバースペースがそれぞれの社会への問題提起や代替案提示の役割を果たすという指摘は共通しているものの、それは政治変動と結びつくような凝集力や権威づけを前提としていない。映画の考察をとおして、文化・自己意識・価値観の多様でゆるやかな構築過程の観察が可能となることが多くの報告から示された。

全体を通しては、紛争や大きな政策転換・政権崩壊などによる政治・社会変化をうけて 1990 年代後半から 2000 年代に映画・映像制作に現れた変化に着目しているものが多かった。映画・映像作品から東南アジア社会を見ることで、政治・経済変化に対する文化的な領域からの対応や人々の理解・表現への考察が深められるだろう。本シンポジウムの続編にも期待したい。